

しゃりばり

CHARIVARI 2017.3 No.407

特 集

地方創生に資する交通政策とは？

～人口低密度地域での新たな
交通手段確保に向けてライドシェアへの期待～

情報企画部レポート

旧ソ連から独立後の四半世紀を迎えた南コーカサス3カ国②

その現状と日本との交流の可能性

～ヨーロッパとアジアの要衝、ジョージア～

医療介護研究部レポート

住民・行政・事業所の協働で作る地域で暮らし続ける仕組み

連
載

新・しゃりばり人 (Vol.11)

巻末エッセー (ぶらりしゃり)

住民・行政・事業所の協働で作る地域で暮らし続ける仕組み

現在、住み慣れた地域で暮らし続けることのできる「地域包括ケアシステム」の実現に向け、日本各地で取り組みが進められているところである。今回は、住民・行政・事業所が開設までに3年以上をかけ、協働で地域の介護施設（地域安心拠点）を作り上げていった北海道鷹栖町の社会福祉法人さつき会の取り組み例を紹介する。

1. 鷹栖町の現状

鷹栖町は、北海道第二の都市である旭川市に隣接する人口7千人の町である。1980年代に農家戸数の減少に伴い人口が減少したが、その後大規模宅地造成などにより人口増となり1975年以降人口は概ね7千7・5千人で推移している。ただし、高齢化を背景に老年人口は増え続け、高齢化率は30%を超えている。鷹栖町の市街地は大きく鷹栖地区と北野地区の2つの地区に分かれている。社会福祉法人さつき会は、鷹栖町の中で唯一の社会福祉法人として昭和49年から活動しており、昭和63年には特別養護老人ホーム、ショートステイ、デイサービスセンターを鷹栖地区で開設した。

2. 検討の経緯

地域の課題として、特別養護老人ホームが鷹栖地区にしかなく、入居待機者も多くいたため介護施設のない北野地区にも新たな介護施設を作ってほしいとの要望が出されていた。事業所としては、せっかく北野地区に作るのであれば、「地域の人に親しまれる施設、地域の人が使いやすい施設、地域の人が協力し

てくれる施設」となる「地域安心拠点」を作ろうと考え、検討がスタートした。

施設開設の3年半前の平成17年11月、まずは行政・社協・事業所による下地づくりとして、月1〜2回の勉強会を実施し、課題の共有や住民参画の仕掛け、地域の顔役探しなどを始めた。この時、住民参画の集まりについては、団体代表やあて職の集まりにするのではなく、主体的な人の集まりにしたいとの意識の共有が図られた。

下地づくりの後、町の各団体の協力を得たいとの思いで、平成18年6月に鷹栖町主催で各団体のリーダーを対象とした「鷹栖町リーダー講演会」が開催された。この講演会において、行政と事業所は後に発起人となるひとりの住民に出会うことができた。すぐに事業所の施設長がその住民の自宅を訪問し、新たな介護施設（地域安心拠点）の検討について相談し、施設検討の勉強会を準備することになった。

すると翌々日に、その住民の方から事業所の施設長に15人の勉強会出席予定者の名簿が渡された。施設長は名簿を基に、改めて施設検討の勉強会についての説明を出席予定者の家を訪問し行った。事業所の施設長の話によると、発起人の住民から事前に話がなされていたため、大変スムーズに説明ができたとの

ことである。

勉強会の名称は「北野の介護を考える住民と事業所の勉強会」となり、2年9カ月間で勉強会16回、親睦会3回、先進地域視察3回が開催された。勉強会では、どういった老後の生活を望むのかといった意見交換や大型の特養と小規模の特養での生活スタイルの違いを細かくみていくことで、自分が入りたいと思う特養はどういった施設なのかという意見交換などを行いながら少しずつ施設像を具体化させていった。勉強会のメンバーは当初15名であったが、きめ細かく継続的に動ける人を増やそうという観点から、施設開設の1年半前に新たに声をかけ、拡大メンバー18名が新たに参加となった。

また、事業所と住民が協力して地域の高齢者の家を廻り、ニーズ調査を行った。結果として191の住民から意見・要望を聞き取ることができた。こうした意見・要望を取込みながら新たな介護施設（地域安心拠点）には、以下の3つの機能を組入れることとなった。

- ① 高齢者が地域に住み続けることを支えるための「24時間365日の安心づくり」…小規模多機能型居宅介護
- ② 自宅でもない施設でもない、認知症・ねたさき等の高齢者が安心して暮らせる「もう一つの家」づくり…小規模特養

「ぬくもりの家 えん」



③ 住民参加型「福祉のまちづくり」を支える地域支援ネットワーク、ボランティアの拠点づくり…地域交流スペース

これらの施設には、住民にさらに親しみを持ってもらおうと名称を町民に公募し、応募総数149通の中から小規模多機能型居宅介護・小規模特養は「ぬくもりの家 えん」に、地域交流スペースは「ふれあい茶ろんてく」に決定した。

その後、住民の声は設計段階にも反映され、地域交流スペースの設備や畑の位置などの決定に活かされた。

3. 開設時及び開設後

開設前までに十分な信頼関係を築いてきたことで住民と事業所の関係は良好で、「ぬくもりの家 えん」の看板や時計や書道などの室内備品等は住民から寄贈されたものが多い。また、住民と施設の職員の懇親会が開催されるなど、物心両面で支えあう関係となっている。

開設後、食事作りなどには地域の女性を雇用するなど地域での雇用創出につながったり、中庭を隣接する保育園の園児のためのマラソンコースとして開放するなど、施設自体が地域に親しまれる施設となっている。

勉強会から始まった住民の集まりは、「ぬくもり友の会」という名称で活動が継続されている。「ぬくもり友の会」の特徴としては、代表や役員を置かない任意団体であり、①仲間づくり（お互い様づくり）、②「老いと介護」を学び考える（生涯学習）、③ボランティア活動（生涯活躍）、の3つを目的としている。「ぬくもり友の会」の活動に参加されている人の言葉を借りれば、「いずれお世話になる施設であるから、早くから仲間づくりをしておきたい」ということが活動の原動力の一つとなっている。

「ぬくもり友の会」の活動では、「コーヒー茶ろん」と称して毎週火曜日に「てくてく」に集まる会や、年に3〜4回の「老いと介護」を学び考える勉強会、花壇・菜園づくりなどがある。特に盛況なのが「朝市『てくてく』」という活動である。朝市は毎年7月〜10月の毎週土曜日に施設の駐車場を使って開催されるものであり、近所の農家が野菜を出したり、フリーマーケットのように出店者が商品を出したりしている。朝市に買い物に来る人は、入居者、地域の人の区別なく楽しんでいる。こうした住民の活動は、事業者側にも多くのメリットをもたらしている。ぎりぎりでの職員配置の中で、レクリエーションと一緒に楽しんでもくれる地域住民がいてくれることで、高齢者の生活に潤いと楽しみが生まれるといった効果や、スタッフも楽しく働くことができ、離職の抑制効果もあるとのことである。

4. 今後の取り組み

これまで鷹栖町では、社会福祉法人さつき会を中心に、「ぬくもりの家 えん」をはじめとした高齢者の受け皿づくりを進めてきたが、要介護度が低い人に対する受け皿だけが欠けていた。そこで、事業所と行政が組んで、平成29年5月を目途に町内にサービス付き高

「ぬくもりの家 たかほ」イメージ図



齢者向け住宅（サ高住）「ぬくもりの家 たかほ」を整備することとなった。

このサ高住は戸数18戸であり、特徴的な点としては、サ高住内にフィットネスクラブを設ける点にある。施設には、専門人材を配置し、地域介護予防活動支援や地域リハビリテーション活動支援の拠点とする。また、地域交流スペースを設け、サロン活動の場・地域食堂として活用することで、新たな地域交流の拠点となることを目指している。

こうした新たな施設に組入れる機能は、これまでさつき会が住民との協働の中で培ってきた関係性の中で把握されたニーズに応えたものであり、良好な住民・行政・事業所の関係性から生み出された成果といえることができる。

今後、必要な取り組みとして、社会福祉法人さつき会の波湯施設長は「介護人材の計画的育成と確保」であると述べている。介護人材がいないことにより、サービスが提供できない時代が来るかもしれないと警鐘を鳴らし、自治体に対しては介護保険事業計画の中に、①介護人材の現況・必要量、②介護人材の体制整備の計画の記載を、北海道には介護保険事業支援計画における介護人材の確保・育成・定着を目的とした市町村・事業所への支援に関わるビジョンと具体策の記載を義務付けてはどうかと提言している。

（文責・神谷憲一）

【参考資料】

- ・社会福祉法人さつき会HP
(<http://satsuki-kai.jp>)
- ・事例レポート③「老いを豊かに」主体的住民参加と介護施設の運営」（2012年、開発こうほう）